

都道府県別賞一等

父の存在、私の存在

岐阜県 各務原市立鶴沼中学校 三学年

岸 小都春

私には自慢の父がいます。タバコもお酒も飲みません。趣味は仕事とでも言いそうな、優しく真面目な父です。そんな父も、かつて、職場を一年近く休んだことがあります。

休職したのは、頸椎を通る神経の束がはみ出した軟骨に圧迫され、それが原因で激痛を発するというものでした。父の右腕はしびれ指先の感覚も薄れていました。

この激痛としびれに耐えてこれからの人生を送るか、危険を伴う手術に身をゆだねるか、父はそんな選択に迫られていたのです。この手術に母は涙を流して反対し、父の両親も反対していました。首の骨を切り開いて内部を拡張するという手術は、医師の手元が狂うだけで半身不随になる恐れがあったのです。

しかし父は、危険な手術を受けることを決断しました。医師を信じ、自分の運命をかけたのです。「生まれてくる子どもの一生を健康な体で見守りたい」というのが父の願いでした。手術をして、ちゃんと動くようになった右腕で私を抱っこしたかったのです。

父は、生命保険に十分な掛け金を納めていました。それは、万一の場合、兄や私が高校に行けなくなったり、家族が生活していけなくなったりすることを防ぐものでした。

お父さんは、命をかけて働いてくれているんだな。だけど、お父さんは私たちの生活を守るためではなく、お父さんの幸せのために生きてほしいとも思います。

私が、「お父さんの幸せって、何？」と聞いたとき、父は、「小都春たちの笑顔を見ることだよ。」と答えました。本当にお父さんはバカみたいで、とつてもかっこいい。いつも人のために頑張って、それで体を壊したくせに。もっと自分のこと考えてほしい。

私は、命に値段があるとは考えていません。けれど、お金は人の幸せの一部だということも理解しています。だから、この機会に保険の実態について調べてみました。

すると、この国での生命保険の世帯加入率は、二十九歳までは平均して七十パーセント程度なのに、それを過ぎるとおよそ九十パーセントに跳ね上がっていることに気がつきました。「結婚」という言葉が頭に浮かびました。

第61回中学生作文コンクール

そして、その後も加入率は上がり、ピークは五十代後半となっているのです。自立する子どもを見送ったあとにも、たくさん支えていきたいものがあるのだと思います。父もその日を笑顔で迎えるために今でも頑張って働いてくれます。

私はそれから、性別、年代別の平均死亡保障額というものも調べてみました。男性では、六十代でも一千万円を超えています。加入しなくても済むとも言える生命保険にこのように入るのは、安心して人生を送り、自分だけでなく、家族にも幸せになっほしいからだと思います。

お父さん、私も頑張るから、長生きしてね。一緒にやりたいことがまだまだあるから。